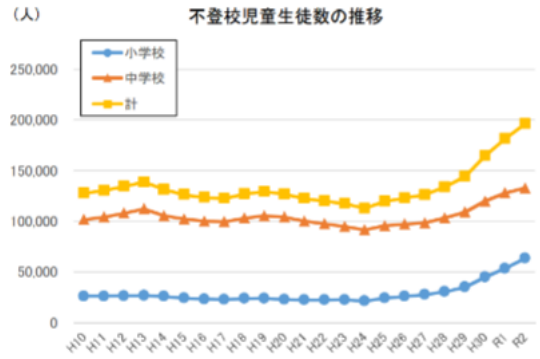
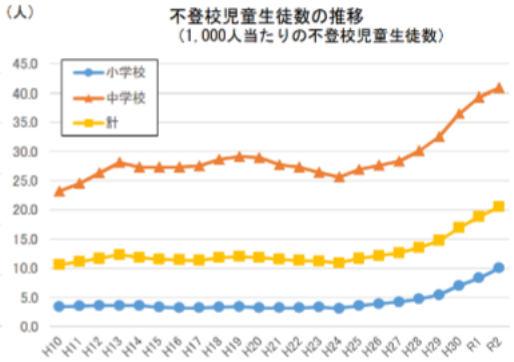
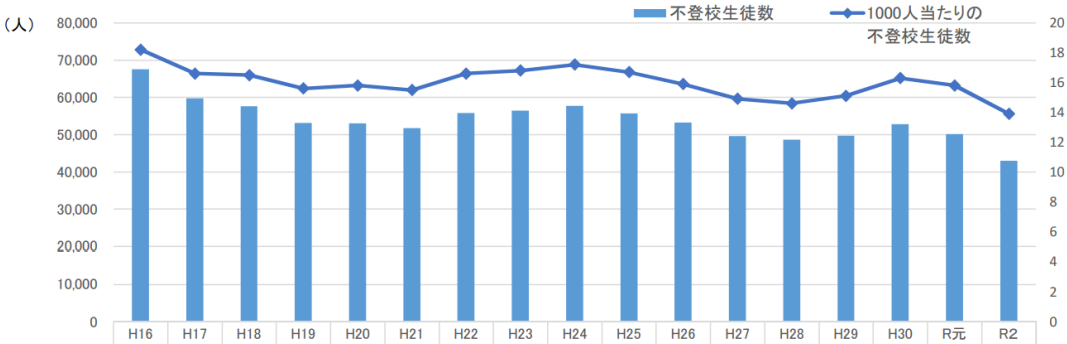
不登校の定義
文部科学省は不登校を、「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくてもできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いた者」と定義しています。

不登校者の推移
小・中学校における長期欠席者のうち，不登校児童生徒数は196,127人（前年度181,272人）であり，児童生徒　1,000人当たりの不登校児童生徒数は20.5人（前年度18.8人）。不登校児童生徒数は８年連続で増加し，過去最多となっています。
高等学校における不登校生徒数は43,051人（前年度50,100人）であり，1,000人当たりの不登校生徒数は，　13.9人（前年度15.8人）となっています。







	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R元	R2
不登校生徒数	67,500	59,680	57,544	53,041	53,024	51,728	55,776	56,361	57,664	55,655	53,156	49,563	48,565	49,643	52,723	50,100	43,051
1000人当たりの不登校生徒数	18.2	16.6	16.5	15.6	15.8	15.5	16.6	16.8	17.2	16.7	15.9	14.9	14.6	15.1	16.3	15.8	13.9

この数値は、不登校の定義である「年間30日以上欠席した者」であるため、30日の欠席はなくても遅刻や早退が多いケース、教室には入れず保健室登校をしているケース、適応指導教室やフリースクールに通い出席同等の扱いとなっているケースは含まれていません。
更には高校生の場合は、通信制高校はそもそもの登校日が年間30日に達していないので、この定義を適用することが出来ません。
以上のことから、不登校の定義には当てはまらないが、不登校と同じような悩みを抱えている方は、これよりかなり多い人数であることが予測されます。

不登校の原因
不登校の原因について、文部科学省の調査データを基に説明します。

家庭環境の影響
家庭は、学校など家庭の外で使ったエネルギーを回復する場所です。外で使ったエネルギーを家庭で蓄えて、子供達はまた外の世界に向かっていくのです。
ところが家庭がエネルギーが回復出来ない場となると、外でのストレスが大きくなった場合、再び外に向かうエネルギーが不足してしまい、不登校などの問題が生じると考えられます。
家庭でエネルギーが回復出来ない要因としては、以下が挙げられます。

①虐待
②両親の不仲
③過干渉
④親の精神的な余裕のなさ

学校環境の要因
不登校の子供達が最も難しく感じているのが、いじめを除く友人関係です。
思春期は「自分らしさ」を確立する時期であると言われています。
自分らしさを確立するためには周囲との比較が必要であることもあり、この時期は「人から見た自分」を強く意識するようになり、そして対人関係に非常に過敏になります。
そのため、何かつまずきを経験すると「自分は周囲に比べて劣っている」と感じてしまい、自尊心が低下し、周りとうまく付き合えなくなってしまいます。
また、近年スマホの普及や家庭機能の低下などの要因により、子供達のコミュニケーション能力が低くなっていることも、友人関係で問題が生じた時に対応が出来ない原因となっていると考えられます。
他、不登校の学校要因としては以下が挙げられます。

①いじめ
②教職員との関係をめぐる問題
③学業の不振
④クラブ活動への不適応
⑤学校のきまり等をめぐる問題
⑥入学、編入入学時の不適応

本人に関わる状況
本人に関わる状況として、最も多い要因として、「不安、無気力」が挙げられます。
日本の教育システムにおいては、「皆と同じ」が求められます。先ほど説明をしたように、思春期の子供達は、周囲と自分との違いに対して非常に敏感になっています。そこに「皆と同じ」にしなければならないというプレッシャーが不安を呼び起こし、更には少しのつまずきがとても大きなことのように感じられ、大きな挫折体験として捉えてしまいます。挫折体験から、「自分には到底対処が出来そうにない」と思うことが増え、「どうせ頑張っても無駄だ」と無気力に繋がっていくと考えらえられます。
他、本人に関わる状況としては以下が挙げられます。

①生活リズムの乱れ、遊び、非行